

劇
16ミリ
白黒／32分

■企画
(財)結核予防会

スタッフ

■製作
村山英治
大西雅夫
■原作
八代きみ子（入選生活記録）
■脚色・演出
金子精吾
■撮影
宮脇 洋
■照明
浅見良二
■編集
高室晃三郎
■記録
上田圭子
■進行
山崎守邦
■音楽
浜坂福夫

■出演
桜井良子
前沢迪雄
斎藤英雄
福島寿美子
市毛包一
三沢康子
菅野直行
角田七穂
他

文部省選定 第21回東京都教育映画コンクール金賞

この映画は、福島県の一少女の作文を忠実に脚色・演出した作品で、結核予防と家族のころの通い合いをテーマにしている。



高橋ブリキ店の主人惣平は、近頃よく咳き込む。「一度医者に診てもらったら」という家族のすすめにも、頑として耳をかさない。妻のよねと娘の和子は一計を案じて診察を受けさせようとするが、計画は失敗する。惣平は家族の生活を思っ、診察の結果を恐れているのだ。よねは、惣平の心情を察して夫の仕事と一緒にについて行く。気丈なよねは、ブリキ屋の仕事も覚えようと夫の後について屋根に上がって手伝い始める。

長男の克巳は、高校進学のことと父とやりあって家を飛び出している。息子も父に似て頑固者である。克巳は学校の帰途、屋根の上で仕事をする両親を見つける。危ない足取りで梯子を降りるよねに、思わず「母ちゃん」と駆けよって助け降ろし、自分も屋根に上がる。克巳は父の熱心な仕事ぶりに、今まで知らなかった父の一面を見たように思った。屋根の上で初めて親子3人の心が通い合う。

それから間もなく惣平は1人で医者を訪れた。案じていた通り肺結核と診断され、入院をすすめられた。「だから医者なんか行きたくなかったんだ」としょんぼりする惣平を、よねも克巳も娘の和子も励ます。その日、家族4人の心はひとつに寄り添った。よねは友達の紹介で保険の勧誘をはじめ、克巳も働きながら勉強するというし、和子も家事を手伝うことになる。高橋ブリキ店は当然「休業」だが、残された3人の生活にはこれまでになかった張り生まれた。よねは今日も帰りは病院に寄るつもりで、夫の着替えを入れた大きなハンドバッグを提げて集金に出掛けていく。